

西行の「花見にと」の一首から

久保田 淳

謡曲『西行桜』の核となる西行の歌は、
花見にとむれつつ人の来るのみぞあたら
さくらのとがにはありける

という一首である。ただし、上掛りでは初句は「花見んと」と謡う。数種類ある西行の家集のうち、『山家集』に載る歌で、その詞書は「しづかならんと思ひけるころ、花見に人々まうで来たりければ」とある。鎌倉時代の末に選ばれた『玉葉和歌集』の巻第二春歌下にもほとんど同じような詞書の下に収められているが、西行が自身愛着を抱いている、あるいは自負している作を自選した『山家心中集』や『御裳濯河歌合』『宮河歌合』などには見えない。西行自身としては軽い気持で、桜に対する愛情をわざと反語的に述べた、冗談めいた歌にすぎないのかもしれない。しかし、『西行物語』では古いテキストとされる伝阿仏尼筆本をはじめ、どの本でもこの歌を取り込んでいる。試みに伝阿仏尼筆本の詞書を掲げると、

柴の編み戸のあけくればは仏の御迎ひをい
つならんと待ちたてまつるに、さもあら

ぬ昔の友、花見にとて集まるついでにも、
何となき昔語りにも心の乱るる方もあり
ければ、よしなしと思ひ

とある。「西行桜」の作者が歌集類にとどまらず、『西行物語』のいずれかの伝本を見た可能性もあるであろう。『西行物語』では西行の出家した場所を、「嵯峨の奥」（徳川家本）としたり、「西山の麓」（伝阿仏尼筆本・久保家本）と語つたりしており、物語の流れでは、そのままその近辺に庵を結んで始めた遁世生活の中で詠まれた歌ということになっている。『西行桜』では立衆頭が「西山西行の庵室」とい、地謡でも「所は嵯峨の奥」と謡うから、『西行物語』で語ることも食い違いはないのである。

一方、『山家集』や『玉葉集』の詞書からは、この歌が詠まれた場所を探る手懸りは見当らない。しかし、吉野や高野で結んだ草庵に花見の人々がやつて来ることは考えられないから、実際にこの歌が詠まれた場所はやはり都周辺の庵だったのであろう。ただ、都周辺の

どのあたりでの詠かは、確認することはむずかしい。

この歌について、桜に対する愛情の反語的表現といったが、まことに西行の桜に寄せる愛情は並々ならぬものがある。端的にそれを知らうとするには、別名を「花月集ともいふべし」とした『山家心中集』の「花三十六首」を読むのがよいであろう。そこでは吉野の桜をはじめとして、都の白川の桜、信濃の風越しの峰の桜、志賀の山越えの桜などが歌われている。中でも吉野の桜は三十六首中八首を占めている。それらのうち、

白川の梢を見てぞなぐさむる吉野の山に
通ふ心を

という一首は、直接的には洛東白川の桜を詠んだ歌ではあるが、身を都の内に置きながら吉野の桜に心を馳せる西行の心情をよく物語っている。その他、『山家集』では、熊野九十九王子の一である八上王子の桜、那智の桜、高野の桜、出羽の滝の山の桜、平泉の束稲山の桜、『聞書集』では下野の黒髪山の桜、洛北雲林院の桜、比良山の桜、『残集』では奈良の法雲院の桜、『御裳濯河歌合』では伊勢の桜といった具合に、西行は日本各地の桜を歌っている。桜自体とともにそれを咲かせる土地、風土に対する西行の関心を探るために、西行の歌った桜地図といったものを描いてみるのもよいかもしれない。

「花見にと」の歌では「むれつつ人の来る」ことを厭う心が述べられている。『山家集』で

はこの歌に続いて、

花も散り人も来ざらんをりはまた山のか

ひにてのどかなるべし

という歌が並び、これも同じ時に詠まれた作と考えられる。この第四句「山のかひ」の「かひ」は「峽」と「かひあり」「かひなし」などという「かひ」の掛詞である。ここでも人の訪れないことによつてもたらされるのどけさを喜んでゐる。これらの歌によれば、西行の裡には人との接触を煩わしく厭わしいとする心の強かつたことがうかがわれる。

けれどもまた、

花も散り人も都へ帰りなば山さびしくや

ならんとすらん

とも歌つてゐる。また、「花見にと」「花も散り」の二首に続いて、

かき絶え、言問はずなりにける人の、

花見に山里へまうで来たりと聞きて

よみける

年を経ておなじ梢にほへども花こそ人

に飽かれざりけれ

という歌もある。西澤美仁氏の注（和歌文学大系21『山家集 聞書集 残集』、二〇〇三年刊、明治書院）にいうように、あたかも紀貫之に「人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香ににほひける」の名歌（ここでの「花」は梅の花だが）を詠ませた初瀬の家のあるじにも似た心で詠んでゐる。いささかすねた心情が歌われているが、そのようなすねた姿勢は人の訪れを待ち望む心と表裏をなしているの

ある。西行はこのように閑寂な遁世生活を妨げるものとして人の訪れを厭う一方では、時にはさびしさを慰めるために人の訪れを待つという、矛盾した心を抱いていた。

じつはそれは西行独自の心のありようではなく、遁世者に共通なものなのであろう。『徒然草』の作者兼好の家集『兼好法師集』にも、

人に知られじと思ふ頃、古里人の横

川まで尋ね来て、世の中のことども

いふ、いとうるさし

年経れば問ひこぬ人もなかりけり世の隠

れがと思ふ山路を

されど、帰りぬるあと、いとさうざ

うし

山里は問はれぬよりも問ふ人の降りての

ちざさびしかりける

という歌が見える。

さらにいえば、そういう矛盾した心は遁世者に限るものではなく、人間の誰しもが抱いているものであろう。誰にも潜むそのような自身の心の内の矛盾を見つめ、言葉に托しているのが、西行や兼好なのであろう。

「花見にと」の歌で注意してよいと思われるのは、「とが」という言葉とその用い方である。

「とが」という語は『万葉集』や平安前期の歌にも用例が見出されるが、さほど多いとはいえない。それが平安後期あたりから漸増する傾向が認められる。用例を見ると恋歌や述懐歌での用例が多く、作者としては西行がかなり多くの歌で用いていることが知られるので

ある。これらのことは野村倫子氏が久保田・馬場あき子編『歌ことは歌枕大辞典』（一九九九年刊、角川書店）の「咎」の項で指摘しておられる。氏は西行が多用了たことについて、「出家者として「罪」の多用とも深くかわかると思われる」と言われる。おそらく、

数ならぬ心のとがになしはてじ知らせてこそ身を恨みめ

身を知れば人のとがとは思はぬに恨みが

ほにも濡るる袖かな

などの『新古今和歌集』入集歌を念頭に置いてのことであろう。

その通りであると思うが、ここでは本来人間の心情や行動に関して用いられる「とが」という言葉が、「さくら」という非情のものについて用いられていることに注意してよいと思う。同じような用い方として、

春深み枝もゆるがで散る花は風のとがにはあらぬなるべし

わび人の住む山里のとがならん曇らじも

のを秋の夜の月

などの作が挙げられる。もつとも、「わび人の」の歌では、「山里のとが」は住人である「わび人」のとがに帰するのではあるが……。

このような「とが」という言葉の用い方からも、非情な「花」や「風」を有情な存在として捉えようとする西行の姿勢を看取することができるのである。（東京大学名誉教授）